

横浜市小学校社会科研究会

3 学年部会

研修会記録

第4号

令和3年 12月 1日

横浜市小学校教育研究会

会長 後藤 俊哉

横浜市小学校社会科研究会

会長 梅田 比奈子

同 学年部長 引田 雄士

【提案日時】

11月10日(水)

提案 鳥山 陽子 先生(東山田小)

【会場】

横浜市立 平沼小学校

司会 下島 孝志 先生(瀬ヶ崎小)

記録 中村 勇翔 先生(稲荷台小)

○单元名：「東山田のまちを火事から守る」

○提案者より

〈視点①〉

- ・子どもの予想から見通しをもった学習問題・計画を立てる。(子どもの疑問を短冊でまとめたり教師が分かりやすく板書でまとめたりする)
- ・消防団の体験活動を行うことで消防士との違いを考えることができたが消防士ともっと関わりをもちたかった。

〈視点②〉

- ・本気の学習問題「消防士がいるのに、どうして消防団がいるのだろう。」
- 消防団の必要性が子どもの中で100%だったため対立が生まれなかった。
(消防ポンプ車の導入を地域の寄付で購入した資料を提示し、1秒でも早く現場に行くことや地域の住民の願いに迫りたかった。)

○協議内容

〈資料について〉

◎本気の学習問題へつながる資料の価値

- ポンプ車は地域の方の寄付で購入「なんで？」と疑問を生じさせることで消防士と消防団が連携している他に地域の方も協力や安全なまちづくりを願っていることの社会的事象に迫っていく。
- 消防団の方の話から存在意義についてより価値を深めていく。

◎事実をもとにした学習問題

- 横浜市の年間火災件数約600件を子どもが多いと見るか少ないと見ることで、地域の中で消防団の出動や活動が少なければ「消防団は本当に必要なのか。」という本気の学習問題が自然と子どもの言葉から出てくる。

〈板書について〉

◎構造的な板書

→本時「どうして消防団が必要なのか。」の振り返りを行う時に、一時間の授業で何を学んだのか分かるように子どもの言葉でつないだ板書が大切。

→消防署・消防団・まちの人が協力して、防火につとめていることが分かるようにつなげることが大切。

◎見通した学習問題の提示

→子どもたちと立てた見通す学習問題を毎回振り返ることができるように掲示しておくことで子どもたちが立ち返って考えることができる。

〈講師の先生より〉

大道小学校 加藤和之校長先生

「学んだことを自分ごととして、生活にどのように生かしていくのか。」

◎単元や本時を通して何を捉えさせたいのか。

・子どもなりの言葉で消防団を捉えているが対立が生まれなため狙いを明確にもつ。

◎ゆさぶりのある資料を提示する。

(本時の資料：ポンプ車1350万円が寄付、横浜市の消防団の中で2台しかない)

→資料のどこに注目させたいのか、資料の見せ方を工夫する。

※言葉一つ、写真一つどこで見せていくのか大切！

◎「消防団は必要なのか。」という抽象的な学習問題が多い。

→ポンプ車を使った具体的な学習問題を子どもと作っていくとよい。

◎体験活動を生かした学習計画を立てる。

→消防団のことを経験したからこそ単元の終盤で学ぶ計画でもよかった。

文責 八木 浩司 (南吉田小学校)